ポストモダニティーのこれからを生きる

~ポストモダニティーの条件を読んで~

法政大学 国際文化学部 国際文化学科
森村・川村ゼミ
２００６年度前期グループ発表論文

３年D組　０４Ｇ０３１３
小林由拓

■目次

＜序章＞　はじめに

【第１節】はじめに

【第２節】用語の定義

＜第１章＞　モダニティーとモダニズム

【第１節】モダニティーの性質

【第２節】啓蒙思想

【第３節】創造的破壊

【第４節】モダニティーと資本主義

＜第２章＞　ポストモダニズム

【第１節】ポストモダニズムの出現

【第２節】大きな物語

【第３節】歴史の終焉

【第４節】「ポスト」モダニズムか、ポスト「モダニズム」か？

＜終章＞　おわりに

【第１節】まとめ

【第２節】考察その１―これまで

【第３節】考察その２―これからの発展

＜序章＞　はじめに

【第１節】　はじめに

２００１年９月１１日、「ハイジャックされた４機の大型ジェット旅客機が、ニューヨーク・ワールド・トレード・センタービル、アメリカ国防総省などの地上施設を目掛けて意図的に激突し、犠牲者約３０００人を出す甚大な被害を及ぼした。」略して「９．１１」と呼ばれるこの事件は、テロ事件としては史上最大の被害となった。２００６年現在でもまだ記憶に新しいこの事件が及ぼした悲劇はこれだけには留まらなかった。「喪失感が充満する中でアメリカ国民は、求心力を愛国的な意識を共有することに求め、速やかな報復を肯定する世論が形成されていき、具体的な証拠が挙げられないうちから、ＣＮＮなどのアメリカの大手マスコミなどにおいても、イスラム原理主義を信奉するアラブ系人種によるテロ説が浮上し、流説に乗せられた市民によるアラブ系住民への暴行事件が多発、アラブ系男性が射殺される惨事にまで発展した。」このテロ事件後のアメリカの世論の変化に合わせて、イラク、イラン、北朝鮮などをテロ支援国と断じて「悪の枢軸」と呼び、「アメリカの防衛のためには予防的な措置と、時には先制攻撃が必要」として、「アメリカ合衆国はイラクに対して大量破壊兵器を隠し持っているという疑惑を理由に、イラク戦争に踏み切った。」しかしイラクを民主化することを目的に行われたこの戦争は更に、民間人・兵士を合わせて、約９８０００人にも達すると推測される犠牲者を出している。アメリカによる一方的な戦闘終結宣言の後も、地下に潜った反米武装勢力による米軍や有志連合に対するテロ攻撃が頻発しており、反米武装勢力と米軍との戦闘に巻き込まれる民間人の犠牲者も出している。

この悲しい事件、戦争の連鎖は、なぜ起こってしまったのであろうか？それは価値基準、道徳基準のずれている者同士が自らの主義・主張を他より正しいものとし、他の者にその主義・主張を押し付けようとしたために起こってしまったのではないだろうか。民主主義に根ざした国の国民には、サッダーム・フセインのいうところのジハード（聖戦）の名の下に戦う者の心裡は理解しがたいものであり、また、ジハードの名の下に戦う者にとっては、民主主義の良いところを理解するのは難しい。このように主義・主張の押し付けや暴

走によって引き起こされる不和、悲劇はこれまでの歴史上で何度も見ることが出来る。

そこで本論では、近代（１９００年から１９７０年ごろまで）から現代までを、前期に学んだモダニズムからポストモダニズムという主義の変遷から振り返り、現代に起こっている悲しい事件、戦争の連鎖という歪みへと繋がってゆく道のりと、その連鎖の打開策として現在考えられているシステム、そしてその打開策が内包する問題点を考察してゆく。

【第２節】　用語の定義

本論では、デイヴィット・ハーヴェイの『ポストモダニティーの条件』（これ以後「本書」とする）に記されている順番に則り、まずは第１章でモダニティーとモダニズムについて明らかにし、次に第２章でポストモダンについて明らかにし、モダニズムとポストモダニズムに共通点、または差異があるのかを考えてゆく。終章でこれらの主義が現在の私達にどのような影響を与えているのかを、現代に起こっている悲しい事件、戦争などの不和の連鎖と絡めて考え、終章の最後ではその打開策と、打開策の内包する問題点について考察してゆく。

本論を書き進めるにあたり、第１章に入る前にまずいくつかの用語について、その概念の定義の整理をしておきたい。これは、複雑に絡み合った時代区分や主義を理解するのにその用語について整理しておくことが必要だからである。この定義の整理には高田明典の著書『ポストモダン再入門』のなかでの定義を引用してゆく。まずは、モダニティー、モダニズム、モダンについて、その定義を記してゆく。

「モダニティー：　モダン状況（近代状況）もしくは近代性を指す。近代状況／近代性とは、知性の力によって、ある社会が過去の悪弊を除去し、進歩／発展を達成しつつある『状況』のことを指す。」

「モダニズム：　モダニズムとは、主知主義／理性中心主義的な考え方に則って、『現代人の知性によって、過去の悪弊を除去し、幸福を追求できる』とういう考え方のことを指す。」

「モダン：　主知主義・科学主義・理性中心主義・進歩主義、などの要素を帯びた様々な事柄に冠する『修飾語』。思潮としての時代区分。（１９００年から１９７０年頃まで）」

次に、ポストモダニティー、ポストモダニズム、ポストモダンについて、その定義を記

してゆく。

「ポストモダニティー：　『ポストモダン状況』という意味で使われる。これは思想でも、思想の枠組みでも、ある主義でもない。『ある一つの状況』を表す言葉である。」

「ポストモダニズム：　モダニズムの後に位置する『一つの思想の枠組み』のこと。」

「ポストモダン：　『モダンの後に位置する、(今は分からない) 何か』に冠する『修飾語』。思潮としての時代区分。(１９７０年頃から現代まで)」

以上をまとめると、次のように定義する事が出来る。「モダン」とは、ある時代区分（１９００年から１９７０年頃まで）のことで、その時代の状況が「モダニティー」であり、「モダン」の時代にあった主知主義／理性中心主義などの考え方が「モダニズム」である。また、「ポストモダン」とは、「モダン」の次にある時代（１９７０年頃から現在まで）のことで、その時代の状況が「ポストモダニティー」であり、「ポストモダン」の時代に出てきた思想の枠組みが「ポストモダニズム」である。

用語の定義の整理が済んだところで、次に、第１章ではモダニティーとモダニズムについて考えてゆきたい。

＜第１章＞　モダニティーとモダニズム

【第１節】　モダニティーの性質

ハーヴェイは、本書において、まず「モダニティー」がどのような時代状況で、どのように変化したのか、またその背景、そしてモダニティーによってもたらされた「モダニズム」が、どのような変遷を辿ったのかについて述べている。本書の第２章の冒頭でハーヴェイは、ボードレールの独創的な論文である『近代生活の画家』（１８６３）という論文から、モダニティーの特徴を引用している。「現代性とは、一時的なもの、うつろい易いもの、偶発的なもので、これが芸術の半分をなし、他の半分が、永遠のもの、不易なものである。」このボードレールの論文の一節は、モダニティーの性質をとてもよく表している。モダニティーの性質には易の面、つまりうつろい変わってゆく面と、不易の面、つまり永遠で変わらない面があるのである。

【第２節】　啓蒙思想

モダニティーの特質の片方である易の面を説明するのに重要になってくるのが啓蒙思想である。啓蒙思想とは、「１７世紀末葉に起こり１８世紀後半に至って全盛に達した旧弊打破の革新的な思想」であり、「人間的・自然的理性（悟性）を尊重し、宗教的権威に反対して人間的・合理的思惟の自律を唱え」、「人間生活の進歩・改善、幸福の増進を行うことが可能であると信じ、宗教・政治・社会・教育・経済・法律の各般にわたって旧慣を改めることで新秩序を建築しようとした」（広辞苑）ものである。本書でも啓蒙思想について同じように、「進歩思想を信奉し」、「歴史や伝統を積極的に廃棄しようとした」運動であると述べられている。つまり啓蒙思想とは、客観的科学、普遍的な倫理と法によって、人間を神話、宗教、迷信の鎖から解き放ち、「人間の奥に潜む闇の部分から解き放つ」とともに、「専横な権力行使から解き放つ」ものとして受け入れられたのである。その背景には、大きな社会的変化があった。それはつまり蒸気機関による産業革命である。人類は蒸気機関を手に入れることにより、それまでにはなかった速さで科学的、技術的発展を遂げ、神から解き放たれたのである。この啓蒙思想を唱えた「啓蒙思想家たちは変動の大波を歓迎し、刹那

的なもの、束の間のもの、断片的なもの」、つまり易の面を、「モダンのプロジェクトが達成される過程において不可避な状態であるとみなした」のである。しかし、この易の性質は「あらゆる人間に備わっている普遍的で、永遠かつ不変である属性が開花する」、つまり不易なものを目指す過程であったということを述べておきたい。この不易なものを目指すという、啓蒙主義のもう一つの側面、つまりあらゆる人間に備わっている真理という究極を求める側面は、ホルクハイマーとアドルノが『啓蒙の弁証法』で問題提議しているように、「人間解放の名において普遍的な抑圧のシステムへと変容することを回避できない」のである。そして、これがナチス・ドイツによって利用され、ホロコースト（ユダヤ人大量虐殺）にまで至ってしまうのである。マックス・ウェーバーはこの啓蒙思想によって生まれてしまった抑圧のシステムを「鉄の檻」と呼び、啓蒙思想の「合理性の形態は、経済構造、法律、官僚的支配、さらに芸術さえも含む全領域に影響をおよぼし、浸透」し、「（目的―手段的合理性の）発展は、普遍的自由を具体的に実現する方向にではなく、何の出口もない官僚的合理性の『鉄の檻』を生みだす方向に導いた」と述べている。

【第３節】　創造的破壊

ボードレールの定式の通り、モダニズムは不易を目指す一方で、不易を目指すが故に易であるという性質も持っていた。不易なものを求めて、古くなったものを破壊し、次から次へと新しいものを作り出していったのである。この「ニーチェ的なイメージ」を「創造的破壊」という。この創造的破壊は、特に建築や都市計画に顕著に現れる。科学・産業の進歩により、加速しながら次から次へと新しいものを生み出し、断片化を繰り返す中にあっても、不易なものを求めて、モダニズムは神話を作り出し続けた。建築で考えるならば、過去の歴史的、伝統的な形式を破壊しながら、「鉄筋、コンクリート、ガラスによる工法」、「直線的、無装飾、幾何学的なスタイル」、「ル・コルビジェのモデュロール」などの現在でも使用されているような形式や概念を最良のものとして生み出していった。しかし、このように不易なものを求める過程で、モダニズムは国家や企業のイデオロギーとして利用され、前述したナチス・ドイツの例のような悲劇を生み出している。そしてこのことが、反モダニズム運動の展開されるきっかけとなってゆくのである。

【第４節】　モダニティーと資本主義

モダニティーを考える上でもう一つ重要になってくるのが、資本主義との関係性である。モダニティーと資本主義の関係性は、本書でも第５章でマルクスの『資本論』を用いながら触れられている。「永遠に革命的で破壊的な力を自らの世界の歴史にとどめることを保証するような規則を内在化した社会システム」である資本主義が、不易なものを求めて新しいものを次々と生み出し古いものを破壊してゆく、創造的破壊の根底に流れていたのである。ハーヴェイも「モダニティーについて唯一確かなものが不安定な状態」であるなら、その不安定な状態の由来は資本主義であると示唆している。資本主義の絶え間ない生産に影響され、芸術はより商業的な意味を強め、建築はより経済的に効率よく誰にでも受け入れられる普遍的な形態を求めて画一化していったのである。しかし、戦後復興を終え、不易を求めて画一化したものが溢れかえる状況に陥ったとき、資本主義の流れる方向が変わった。つまり、不易で普遍的なものを求める方向から、差異のある易なものを求める方向へ変わったのである。このボードレールの定式で言うところの不易から易への比重の移り変わりがモダニズムからポストモダニズムへの変遷である。

＜第２章＞　ポストモダニズム

【第１節】　ポストモダニズムの出現

ポストモダニズムが現れるのは１９７０年代である。二度の世界大戦、戦後復興を経て、１９６０年代までの時代においては、不易を求める「モダニズム」という主義主張が大勢を占めていたが、モダニズムを利用したナチス・ドイツなどの独裁支配への反発や、大戦後の必要最低限のものも揃わない状況下で人々に共通していた意識、つまり「他の人と同じくらい経済的に豊かになること＝幸福」という意識が、戦後復興を経て画一化されたものが溢れかえった状況の中で、「他の人とは違う、他の人より豊か＝幸福」という意識へと変わって行ったことで、１９７０年代に入ると「モダニズム」に反発するようにして「ポストモダニズム」が現れてくる。このようにしてポストモダンの時代においては不易が求められることはなくなり、つまり唯一絶対の価値はなくなり、多様な価値が現れ、価値の相対化が進んで行くのである。この価値の相対化は、戦後復興が終わり画一化されたものが一通り人々に行き渡り、行き場所を失った消費を、差異のある易の方向へと導くのである。そして、これによって根底に流れる資本主義の流れる方向も変わったのである。

【第２節】　大きな物語

ポストモダニティーを考える上で重要となってくるのがリオタールの「大きな物語」（メタ物語）という概念である。リオタールは『ポストモダンの条件』の中で、「極度の単純化を懼れずに言えば、ポストモダンとは、まずなによりも、こうしたメタ物語に対する不信感だと言えるだろう」と述べている。また、リオタールは別の著書で次のようにも述べている。「われわれは、過去二世紀の西欧人が人間性の全般的進歩という原理に対しておいていた信頼に、一種の失墜を見てとり、確証する事が出来る、ということだ。可能であり蓋然的でありあるいは必然的であるような進歩というこの考え方は、芸術・テクノロジー・認識およびさまざまな自由の発展が、人間の総体にとって利益をもたらすものだという核心に根ざしている。」ここでは、「大きな物語」を「人間性の全般的進歩という原理」というかたちで述べている。この「大きな物語」とは「共通の土台」、つまり芸術や建築や社会や

経済、その他様々な分野においてモダニズムの時代には共通していた意識や考え方や価値のことである。この「共通の土台」が見出せなくなった状態こそがポストモダニティーである。

共通の土台を失い、相対化してしまったポストモダニティーでは、「より良い方向」について人々の間で合意がとれないという状況が、表にあらわれてくる。例えば、ある人にとっての「より良い社会」は、別の人にとっては「とても住みにくい社会」かもしれない、ということである。もっと具体的な例を考えるならば、本論の序章で述べた「アメリカ同時多発テロ」と「イラク戦争」がわかりやすい。「聖戦」として同時多発テロに加担した者にとっては、その行為は「世界をよりよくする行為」である一方、ワールド・トレード・センターの中にいて被害に遭った人々や、その家族、さらにはアメリカ国民にとって、同時多発テロは、「自分達の平和な生活を乱し、脅威にさらす行為」である。また、「イラクの自由（Operation Iraq Freedom）」という作戦名に大義名分を見出し、イラク戦争に踏み切ったアメリカ、そしてそれを支持し後押ししたアメリカ国民にとって、イラク戦争は「民主主義によって独裁者から人々を救い出す解放戦争」である一方で、民主主義に価値を見出していないイスラム原理主義者達や、イラク国民にとって、イラク戦争は「報復戦争であり、侵略行為」でしかないのである。

私たちは、常々この「より良い方向」について人々の間で合意がとれないという状況を経験し、そしてそれを打開する方法を考えてきた。ここでも身近で具体的な例をあげて考えてみたい。例えば、小学校、中学校などの教育現場で、最近「ゆとり教育」という言葉が流行っている。このゆとり教育の名の下に、これまで国が「一番良い」と決めたカリキュラムで行われてきた授業に幅が設けられ、それぞれの学校や先生の判断によって様々な授業が展開されている。その「ゆとりの時間」を課外授業に使う学校もあれば、今まで通りに数学や国語の授業にあてる学校もある。また、今まで以上に数学や国語の授業に熱心に力を入れる学校もある。この「ゆとり教育」なるものは、学校に通う子供達とその親たち、そして教育を考える世間の人々が、これまで「一番良い」とされてきたものが「本当に一番良い」という共通の認識を持てない状況が表にあらわれ、それに応える形で生まれたのである。「ゆとり教育 - 個性を伸ばす教育」に関連して、もう一つ例を挙げよう。昔は

よく先生に「これをしてはダメ！」ということを言われたが、この頃はこのような場面を見かけることが減っているように感じられる。その代わりに先生は悪いことをした（と先生が判断した）子供に「なんで～をしたの？」尋ねるのである。これは子供に、それぞれの価値基準の違いや、その違いを理解したうえで解決を図ることを教えるためである。しかし、このゆとりや個性が最低限の秩序がないままに氾濫し、肯定され助長されることで出てくる問題もある。この点については終章で述べてゆく。

【第３節】　歴史の終焉

もう一つ、ポストモダニティーを考える上で欠かせないのが「歴史の終焉」という概念である。この「歴史の終焉」とは、端的に言ってしまえば、時代を押し動かしてきた「大きな物語」がなくなってしまうということである。ここで言う歴史とは、「人類の、あるいは社会の『固有の』歴史の底に流れているなにがしかの『価値観』のことを指す言葉」であり、「時代精神」とも言える。モダンの時代には「次の時代には前の時代よりも進化した時代がやってくる」、「新しい時代のほうがすばらしい」という時代精神が人々の間にあった。少なくとも、２０世紀の中ごろまでにおいて支配的だったのは、この「時代は良い方向に進化する」という考え方であり、「前の時代より悪くなったというのは『特殊な例』として語られるだけのものであり、また、少数派の意見である場合が多かった」のである。ところが、ポストモダニティーでは、「極めて多くの人間が『歴史の進化』、『時代の進化』、『人類の進歩と未来』を疑って」いるのである。ポストモダニズムは、この「歴史の終焉した」ポストモダンの状況において、「古典 - モダン の延長線上に存在するものではなく、その『歴史的流れ』の外に立とうとする一連の営みである」言える。つまり、「モダンよりも古典のほうがいいとか、古典よりもモダンのほうがすばらしいといった『時代の先後による価値判断』をすべて捨てるという立場」をとるのである。

【第４節】　「ポスト」モダニズムか、ポスト「モダニズム」か？

ポストモダニズムは価値の相対化という特性において、「他者の意見の真正性を認めることによって新たな方向を切り開いて」きた。それは、普遍性を、抑圧のシステムである「鉄

の檻」へと変容させてしまう、モダニズムの弊害を克服したもののようにも思える。しかし、ポストモダニズムは「政治経済の現実やグローバルな権力の実情と向かい合うこと」を避けてしまったために、「たちまちのうちにそうした他者の意見を不透明やあれこれの言語ゲームの特異性のうちに押し込めることによって、他者の意見がより普遍的な権力の源泉に近づくことをさまたげて」しまうのである。「不均衡な権力関係の世界において」ポストモダニズムは、他者である女性、少数民族・人種、植民地の人々、失業者、若者などの意見を脱権力化するのである。つまり、ポストモダニズムは他者の存在（色々な価値観や考え方の存在）を認めながらも、自己の正しさを主張する（主張できるだけの力を持っている）者たちの存在によって、他者が権力の源泉に近づくことを許さないのである。

モダニズムは、大きな物語の上で不易のものを求めて神話を生み出してきた。そして普遍性を求める過程で、その対価としてホロコーストなどの多大な犠牲を払ってきた。ポストモダニズムは、それぞれ個々人の小さな物語の上で、それぞれ別々の神話を生み出している。そして、一見他者の意見を認めることによって、モダニズムの弊害を克服したかのように見える。しかし、「政治経済の現実やグローバルな権力の実情と向かい合うこと」をさけているがために、他者を権力の源泉から追いやるという犠牲を生み出している。

モダニズムとポストモダニズムの両者に共通して、必ず他のものを排除しようとする動きが、結果的に働いているのである。このことから考えると、モダニズムとポストモダニズムは、それぞれ生み出した神話の規模こそ違うもののど、同じ方向に進んでいるのではないかと推測できる。つまり、ポストモダニズムは、ポスト「モダニズム」なのである。

＜終章＞　おわりに

【第１節】　まとめ

モダン、ポストモダンという時代の流れの中でどのような背景の中で、どのような主義、主張がなされ、どのような結果を残しているのかをまとめると、概ね次の通りである。

まずモダンの時代についてまとめる。モダンニズムが生まれてくる背景には、１８世紀後半に台頭してきた啓蒙主義があった。この啓蒙思想は、客観的科学、普遍的な倫理と法によって、人間を神話、宗教、迷信の鎖から解き放ち、「人間の奥に潜む闇の部分から解き放つ」とともに、「専横な権力行使から解き放つ」ものとして受け入れられていった。更にこの背景には、大きな社会的変化があった。それはつまり蒸気機関による産業革命である。産業革命により、それまでにはなかった速さで科学的、技術的発展を遂げ、神から解き放たれた人類は、変動の大波を歓迎し、刹那的なもの、束の間のもの、断片的なもの、つまり易を受け入れ、創造的破壊を続ける一方で、その先には真理、つまり不易なものがあると信じていた。しかし、この真理という究極を求める側面は、「人間解放の名において普遍的な抑圧のシステムへと変容すること」を回避できなかったのである。そしてこれが、ホロコーストにまで続く惨劇を生み出すし、この矛盾に人々が気付くことでポストモダニズムが登場してくるのである。モダニズムからポストモダニズムへの変遷は「資本主義」という観点からも見ることが出来る。資本主義の絶え間ない生産に影響され、芸術はより商業的な意味を強め、建築はより経済的に効率よく誰にでも受け入れられる普遍的な形態を求めて画一化していった。これがモダニズム建築に見られる「鉄筋、コンクリート、ガラスによる工法」、「直線的、無装飾、幾何学的なスタイル」を生み出していった。ところが、戦後復興を終え、画一化したものが溢れかえる状況に陥ったとき、消費の流れる方向が変わった。つまり、不易で普遍的なものを求める方向から、差異のある易なものを求める方向へ変わったのである。この資本主義の流れの変化がモダニズムからポストモダニズムへの変遷に大きく影響していることは明らかである。

次にポストモダンの時代についてまとめる。ポストモダニズムはモダニズムに続いて出てきたものなので、モダンの時代なくして語ることは出来ない。ポストモダニズムが生ま

れてくる背景には、モダニズムが普遍的な抑圧のシステムに成り下がり、不易の体現に失敗したことが大きく関係している。不易の体現の失敗に気付いたことで、大きな物語、つまり共通の土台を失い、相対化してしまったポストモダニティーでは、「より良い方向」について人々の間で合意がとれないという状況が、表にあらわれてくるのである。この大きな物語の喪失は、極めて多くの人々を、モダンの時代にあった「次の時代には前の時代よりも進化した、すばらしい時代がやってくる」という考え方から、「歴史の進化、時代の進化、人類の進歩と未来というのは幻想なのではないか」という考え方に導いている。これが「歴史の終焉した」である。ポストモダニズムは、この「歴史の終焉した」ポストモダンの状況において、「古典 - モダン の延長線上に存在するものではなく、その『歴史的流れ』の外に立とうとする一連の営みである。

【第２節】　考察その１－これまで

この考察その１では、ここまで見てきたモダニズムからポストモダニズムという主義の変遷を振り返り、現代に起こっている悲しい事件、戦争の連鎖という歪みへと繋がってゆく道のりを考察してゆく。

不易を求めるモダンの時代には唯一絶対の真理、価値があると信じられていた。そんなモダンの時代においては、道徳という極めて曖昧なものが、唯一絶対のものとして実際に存在すると人々は考えていた。このことは人々に対して、理由など考えずに自らにこの道徳、つまり社会の上の方から与えられる規律を守らせていた。ところが、この唯一絶対の真理は「人間解放の名において普遍的な抑圧のシステムへと変容」してしまい、ホロコーストなどの悲劇へと繋がってゆくのである。

ポストモダンの時代においては、モダニズムの危険な面に接して、人々は唯一絶対の真理、価値の体現の失敗に気がつき、大きな物語を信奉するのではなく、様々な考え方や、色々な人々それぞれにもつ様々な価値観を認めることにより、モダニズムの弊害を克服しようとした。しかし、弊害の克服に成功したかに見えるポストモダニズムは、「政治経済の現実やグローバルな権力の実情と向かい合うこと」を避けているがために、一見偏りなくそれぞれの人々の考え方に目が向けられるようになったと感じられるものの、他者を権力

の源泉から遠ざけてしまっているのである。またその逆に、様々な価値観が認められること（その価値観の持ち主が認められると考えること）で、個が尊重されすぎる状態が生まれ、色々な人々がそれぞれ自分勝手な主張を展開させることによっても不和が生まれている。そして、それぞれに違う小さな物語（個々人の価値観の土台）から物事を見て考えることによって、道徳は弱体化し、人々はお互いの理解を深めることなく、序章で述べたような「アメリカ同時多発テロ」、「イラク戦争」などの悲しい事件、戦争という歪みに陥ってしまうのである。

【第３節】　考察その２－これからの発展

この歪みに陥らないようにするには、どうすればよいのであろうか？またモダンの時代のように不易のものを追い求め、大きな物語を信奉し、全人類に共通の普遍の真理を探せば良いのであろうか？それとも、「モダンの時代には道徳が唯一絶対のものとして実際に存在すると人々が考えることによって規律が守られていた」ように、ポストモダンの時代にも何か規律をもたらすような方法があるのであろうか？

ジル・ドゥルーズは『記号と事件』の中で、概ね考えられるだろう方法を予見している。彼によると、モダンの時代には、自分で自分を監視する「規律訓練（discipline)」というシステムによって人々を秩序立てていたが、ポストモダンの社会では、さまざまな人々を色々な価値観のもとに放置しておきながら、身体もしくは環境を直接管理することで秩序を維持する「環境管理」というシステムが出てくるのである。この「環境管理」とは次に挙げる例のようなことである。「マクドナルドでは硬いいすが配置されているが、これは長いこと客を滞在させず回転効率を高めるためである」。この例はまさに、「人間の動物的な部分に訴えかけてくる権力」と言える。「３０分で食事を終えるのがより良い」と決めるモダンの社会の規律のもたらし方に対して、「いすが硬いせいで何となく３０分で食事を終えてしまう」というやり方で、ポストモダンの社会には規律がもたらされるというのである。もう一つ例を挙げるならば、インターネットにもこういった規律が、私達の気付かないところでもたらされているように思われる。表面上は非常に無秩序で、多様な情報が閲覧できるように感じられるが、インターネットを使っているほぼ全ての人が情報を観覧する際に

検索の手段として使っている、Yahoo!や Google などに代表されるポータルサイトによって、実は、閲覧するべきサイトを自然と決められている。検索のアルゴリズムにより、より良いサイトと、ポータルサイトが認めたサイトが検索結果の上位に表示されるのである。確かにポータルサイトはインターネットに秩序をもたらしているが、よくよく考えると、とても恐ろしいことである。私達は知らぬ間に「管理」されていたのである。このような環境管理というシステムはポストモダンの時代と上手に付き合ってゆくためのシステムになりうるのであろうか。このことは、私達一人ひとりが、きちんと周りに張り巡らされた管理に気付くこと、そしてその管理が適切になされているか、管理の根底にある土台が適切なものか（納得出来ない場合でも、少なくとも妥協できるものか）を注意深く見守り続けることができるかどうかにかかっているのではないであろうか。

＜参考文献＞

・デイヴィット・ハーヴェイ『ポストモダニティーの条件』 青木書店　1999年12月

・ジャン=フランソワ・リオタール　著、小林康夫　訳『ポストモダンの条件』 水声者　1986年

・東浩紀『動物化するポストモダン』 講談社　2001年11月

・暮沢剛巳『現代美術を知るクリティカル・ワーズ』 フィルムアート社　2002年8月

・高田明典『知った気でいるあなたのためのポストモダニズム再入門』 夏目書房　2005年3月

・新村出　編『広辞苑　第五版』 岩波書店　1998年11月

・『インテリアコーディネータープロ用語辞典』 ハウジングエイジェンシー出版局　2002年9月

＜参考ウェブサイト＞

・アメリカ国防総省ニュース: http://www.defenselink.mil/news/

・Iraq Body Count: http://www.iraqbodycount.net/

・日本ウィキペディア: http://ja.wikipedia.org/

・教育改革 Q&A: http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/kaikaku/main4_a1.htm